

◇ 国 語

国 3－1～国 3－19 まで 19 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私は「まっすぐ立っている」という言葉が、幼児だった子供を大学病院の整形外科に連れて行って待合室に坐っている間に、^{注一} orthopaedics という言葉^{注二}をC.O.Dで引いたことから、自分のなかに入って来た、といいました。やはり病院にかれを連れて行くことを重ねるうち、私のなかでもうひとつの言葉というより文節が、ものの見方の中心に坐るようにもなりました。

それは「人間は恢復^{注三}するものだ」というものです。この文節も、具体的に幾つもの病院での経験に裏打ちされています。「人間は恢復するものだ」、それは私が知的な（身体的に幾つかの側面で運動もしている）障害を持った息子^{注四}と一緒に生きて来る過程で（それも私と家内の半生というより一生にわたったことだった、いまでも生の残りに向かって、そのまま続いているといいたいのですが）、なにより確信するに到った思いなのです。

それも、息子がまことに多様に次つぎに現れて来る困難に出会い、そしてつねに「恢復」してきた、しかもかれはそのキョウ^Aにおちいる以前よりあきらかに（なんらかの意味で）前に進んだ、高みに上がった、と見てとってきたことからの確信です。そしていま、私はもうひとりの人間についての具体的な経験を、それに続けてお話ししたいと思います。それは自分が敬愛してきた友人^{注五}の死の後に（三年前、かれは白血病との永い闘いのあけく死んだのですから、普通の意味での「恢復」はなかったのですが、その死がなおあきらかに「恢復」のもたらすものにひとしい力を持っているのです）私に了解されたことなのです。

私が「人間は恢復するものだ」という基本的な信条を（私が「まっすぐ立っている」人間という、やはり基本的な信条を自分のものにした時よりも、それは早かったのですが）かたちづくって行ったのは、光が障害を持って生まれ、頭蓋骨の欠損をつぐなう二つの手術を経て、私と家内の家庭に戻ったの、最初の数年間においてでした。まずそのことからお話しします。

私と家内の生活のまんなかに障害を持った赤んぼうが来た、という日々のとくに最初の一年間の経験については、若い父親の行動や心理にコチョウ^Bしたところがあります。『個人的な体験』という小説に書いています。この小説は、赤んぼうが最初の手術を受け、知的な障害はあるにしても家庭において生き延びてゆける、その最初の安定期に到った、ある日の情景を描いて終

わっています。小説は「恢復」という上向きのトーンにおいてしめくくられている、といっているのです。

そしてこの小説を発表した時、私がおもにこうむった **ア** 的な反響は、その「恢復」の受けとめの樂觀主義に向けられたのでした。三島由紀夫の批評がその最右翼にありました。それは、プロデューサーから、映画はハッピーエンドでなくてはならないといわれた監督の、映画の終わり方だ、というものでした。

じつのところ、無経験な若い父親の私も、手術をしてくださった森安先生が幼児の知的な進み行きについては、どんな

イ 的なこともいわれないのに気が付いてはいたのです。私たちの住んでる近くにあった、赤んぼうが生まれた病院から、救急車で日大板橋病院に運ばれる時、その小さい病院の方の若い医師が、いったん赤んぼうの脇に乗り込んでいた私をわざわざ呼びおろして、この子供は植物人間になるほかない、それを覚悟して、大病院が手術したがっても、 **ウ** 的に判断するように、といった。その種の危機は乗り越えた、と森安先生は保証してくださっていました……

私も家内も、これから赤んぼうの成長にしたがってケンザイ化してくるはずの知的な障害のことは、すっかり予期するようであつたのです。しかし、私らが二階を借りていた住居に赤んぼうを連れて帰り、そして家内がその翌朝から早くも目に見える変化としていった赤んぼうの日々の「恢復」ぶりが、私たちをタンテキに勇気づけたのです。赤んぼうを見るたび、不思議に感じたほです。実際、私は幾度もこんなことを胸のうちでいったものでした。赤んぼうはあれだけ重荷を背負いながら、かれ自身で生命の上向きの坂の道を登ってゆく。もしこの意志が赤んぼうになれば、自分らになにができるだろう？ そう家内に向けても口に出していったのを覚えています。その自然な思いが小説の結びに出ていた、ということなのです。

さて、これは私らに三番目の子供が生まれてからのことですからずっと後になりますが、その男の子の腎臓を診療していただいた、やはり大学病院の教授の方にお礼を申し出ると、むしろ自分の医局の若い学生たちと一晩酒を飲んで話さないかと提案され、お受けしたことがあります。その夜、それぞれ酔ってからのことですが私とあまり年齢のちがわない医師・医学生から、きみの息子さんは手術が成功してめでたいが、自分らのビョウトウにはどんな見込みもない乳幼児がゴロゴロしている、それを見ればあれほど **エ** 的な小説の結末を書くのはためらっただろう、といわれました。その時、私は自分のとらえられた（自

分が夜遅く家に帰って日記に書きつけた言葉をそのまま使うならば）絶望的な怒りに、声を発することもできなかった、それでもその場はなんとかおさまった。その出来事を思い出します。私はその時、自分がそのビョウトウの子供たちよりずっと軽い病状で、しかし知的な遅れはあきらかに現れてくる息子、というようなことを考え、なによりその若い医師・医学生（三）のシニシズムに対して絶望的な怒りにとらえられたのだった、と思い出します。

しかし光自身は、次つぎに起こってくる難しい状態への、家内の不撓不屈（ふとうふくつ）といたい立ち向かい方があつてですが、いつも確実にキュウキョウから「恢復」しました。その次つぎにやってくるキュウキョウ、その連続は避けられないが、しかしつねに「恢復」がある、ということが光との共生をつうじて私と家内が確かめ続けた信条なのです。

光が成長の過程で出会わなければならなかった困難は、十四、五歳の時やってきたてんかんを筆頭に、次つぎとありました。しかしそうした困難に出会いながら、いつもかれが「恢復」してきた、そしてその困難に立ちむかうことで（私ら親ともども）それ以前よりあきらかに一歩前へ進んできた、という思いはいまに続いています。すでにしばしば書いてきたことで繰り返しません、光が視覚において乗り越えられない障害を持ちながら聴覚においては敏感であるのに気づき、ピアノや初歩の楽譜の書き方を家内が教えて、絶対音感があることも発見し、そして優れた先生に巡り会えて作曲を始めるまでみちびいていただいた、その過程もふくんでいます。

私は私らと同じく知的障害の子供を持った真面目なお母さんたちから、どう早期の教育を受けさせれば、たとえば作曲家へという方向で才能を伸ばしうるか、という質問の手紙をいただきます。しかし私と家内は、ただ光が次つぎと苦しい状態に落ち入りながらそこから「恢復」する、その際の上向きの変化を見落とさなかった、そうしたこと（三）の積み重ねにおいて、光の場合、音楽に向かつて行くことになった、ということなのです。たまたま光がかれの作曲をCDにし演奏会を成功させることもできたことは、私ら家族にすばらしい出来事ではありましたが、最初からそれをめざしたということではないのです。ただ、人間が「恢復」するということの根本的な意味あい（三）を、私らは光との共生の歳月において深く信じていることができた。そしてその「恢復」のもたらす前向きの進展にあわせて、家内がたまたま好きであったクラシック音楽への手ほどきをした、それがすべての始

まりなのです。^(四)それ以後のことは、音楽家の友人たちに助けられて、ということは確かにありますが、やはり私らにとつては（おそらく光にとつても）障害にめげず生きてゆくことの、いわば副次的な産物だったのです。

私らの、光との共生の永い歳月を、ただ人間は「恢復」するものだ、という驚きにみちた発見の連続のみが支えてくれたのです。そしてそこから私の文学の核心にあるものが、いわば成育^{セイイク}しもしたのです。このように自然に芽ばえたものにつないで、光はいまもかれなりの音楽理論の勉強を続けて、私らの見るところ、より意識化された進歩の道のりを、ゆつくりとですが着実に歩き続けています。しかしかれが世間的な意味で自立^{リツリツ}することができているのではありませんし、すでに成人病を発する年齢のかれと、こちらは共に老年に到っている私と家内の、さらに続いてゆく共生には、遠からずかつてない重さのキウキョウがやってくることも思わずにはいられません。しかもなお、私らは人間について、「恢復」をなしうるもの、という信条を持ち続けて、なんとかやってゆくはず^五です。私らはそういうやり方を学習してきたのです。

さきに、続けて話すことがある、といました。その白血病で死んだ敬愛する友人エドワード・W・サイドという文化論・比較文学の学者についてなら、御存知の方も多いでしょう。一九三五年に生まれたパレスチナ人ですが、まだ少年といつていい年齢でアメリカに渡って教育を完成し、コロンビア大学で永年にわたって講義をしながら、大きい専門的業績を残しました。文学の範囲を越えての業績としてはパレスチナ人のために世界に訴える時事的な活動を続けた人として、最も強く記憶にきざんでいられる方も、ここには多いのではないのでしょうか？

私は同年生まれということもあつて永く親しい友人でしたが、とくにこの十数年、往復書簡をかわしたりシンポジウムをやったり、さらに個人的な付き合いを深めることができました。一九九一年、定期検診で白血病を発見されて以後もさらに盛んに行つたパレスチナ人のための評論活動に私は感銘を受けてきましたが、その深く広い文化・文学論、ピアノの演奏家だと自称することが不自然じゃなかった、その音楽論、また独自の知識人論、帝国主義文化への批判をつうじて私はかれから教えられました。とくにかれが晩年をかけた、優れた芸術家たちが老年で示す「後期のスタイル」研究は、私自身「後期の仕事^{レイトワーク}」をすべき年齢にさしかかった小説家として身につまされるものでしたし、総体として完成こそしませんでしたがこの仕事についてかれの死後ま

とめられた本『後期のスタイルについて』には推薦文を書くことになりました。

サイド自身の「後期の仕事」についても、私は色濃く関心を抱いてきたわけですが、それをしっかり続ける一方、かれはイ
スラエルとパレスチナの問題について最後の病床でも妥協はしませんでした。緊急の必要事として、それは病いの深まるかれの
肩につねにかかっていたのです。今年、そのサイドの生涯の課題についての最晩年の働きに焦点を合わせて、同僚や友人、知
人たちが追想するドキュメンタリー映画『エドワード・サイド OUT OF PLACE』(2005) が日本の映画人によって作られま
した。私はそれを見て(何度も何度も見ました)、自分がよく知っていると思っていたサイドのというより、最後に会って以
来死を前にして確立された新しい顔というべきものにふれる思いがしたのです。^(天)それは、かれの死後もなお生き延びている自分
の、生涯最後のものともなるはずの死生観へ、新しい光を投げかけてくるとさえいいたいのです。(中略)いま私がそれらの証
言をここで要約しておくとするば、最晩年のサイドは意思の力による樂觀主義をかちとって去って行った、ということです。

(大江健三郎著「ひとりの子どもが流す一滴の涙の代償として」による)

注一 orthopaedics (orthopedics) 整形外科。

注二 COD Concise Oxford Dictionary オックスフォード大学出版局から出版されている辞書

注三 恢復 (回復) 一度失ったものをとりもどすこと。もとのとおりになること。

注四 筆者の息子、大江光さん。一九六三年生まれ。生まれた時頭蓋骨に異常があり、正常な発育は困難だと告知された。出産
の際の緊急手術を受け入れるまでの出来事は『個人的な体験』という作品のモチーフとなった。

注五 後段で触れられるエドワード・W・サイド(1935～2003)のことを指す。

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A キュウキョウ

- ① エイキョウ機関
- ② キョウジョウを見かねる
- ③ キョウメイ病院
- ④ 真理をキョウメイする
- ⑤ キョウシン力が弱まる

B コチヨウ

- ① チョウセン状を突きつける
- ② エンチヨウ戦
- ③ キンチヨウする場面
- ④ チョウエキ囚
- ⑤ チョウメンをつける

C ケンザイ

- ① ケンポウ違反
- ② ケンメイな判断
- ③ ケンコウ保険
- ④ ミケンの書類
- ⑤ 事実がロケンする

D タンテキ

- ① マツタン神経
- ② イツタン停止
- ③ タンペン小説
- ④ タンケン家
- ⑤ タンジュン明快

E ビョウトウ

- ① ジョウトウなお菓子
- ② ケントウ違い
- ③ トウタツ目標
- ④ ショウトウ時間
- ⑤ ジョウトウ式を行なう

1

2

3

4

5

問二 空欄 ア・イ・ウ・エ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑥の中からそれぞれ一つずつ選べ。

ア	① 楽観	④ 否定	② 悲観	⑤ 現実	③ 肯定	⑥ 空想	6
イ	① 楽観	④ 否定	② 悲観	⑤ 現実	③ 肯定	⑥ 空想	7
ウ	① 楽観	④ 否定	② 悲観	⑤ 現実	③ 肯定	⑥ 空想	8
エ	① 楽観	④ 否定	② 悲観	⑤ 現実	③ 肯定	⑥ 空想	9

問三 傍線部（一）「その種の危機は乗り越えた、と森安先生は保証してくださっていましたが……」とあるが、「その種の危機」の内容として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

10

- ①頭蓋骨に先天的な異常があるため、手術をくり返しても決してもとの状態に回復することはないということ。
- ②無経験な若い父親である筆者が、赤ん坊の障害について絶望的な気持ちにとらわれるだろうということ。
- ③生まれた病院から救急車で手術を受ける病院に搬送される際に、容態が急変して危篤状態になるということ。
- ④大病院での手術がたとえ成功したとしても、意識がもとどおり回復することは今後ないだろうということ。

問四 傍線部（二）「もしこの意志が赤んぼうになれば、自分らになにができるだろう？」とあるが、筆者の問いかけの説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

11

- ①大きな障害を持ちながら生命が変化し続ける様子を見て、自分たちの無力さに絶望的な気持ちであるということ。
- ②赤んぼう自身が生き続ける意志を確固として持つように感じ、自分たちの働きかけ以上の希望を感じているということ。
- ③成長を続けようとする赤んぼうの姿に勇気づけられると同時に、自分たちの無力さを痛感しているということ。
- ④成長に従って知的な障害があきらかになることを予想しながら、本人の意志に任せようと決意しているということ。

問五 傍線部(三)「その若い医師・医学生のシニシズムに対して絶望的、怒りにとらえられたのだった」とあるが、具体的に
はどういうことか、本文の説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

12

- ①息子の手術は成功したが、多くの回復の見込みがない乳幼児の存在を示唆されて非難されているように感じたということ。
- ②回復の見込みがない子供たちの病状に対して、息子の知的な障害の方がましだと判断されていると考えたということ。
- ③酔った上のこととは言え、小説家である自分の作品に対して結末を批判され、こらえきれない思いであるということ。
- ④生命の回復という自分たちの考えと異なる、専門家としての冷笑的な見方に対して強い反発を感じているということ。

問六 傍線部(四)「それ以後のことは、音楽家の友人たちに助けられて、ということは確かにありますが、やはり私らにとつ
ては(おそらく光にとっても)障害にめげず生きてゆくことの、いわば副次的な産物だったのです」とあるが、「副次的な
産物」とはどのようなことを言っているのか、説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

- ①優れた指導者に巡り会って作曲を始めるまでになったことで充分に障害を克服する目的は達成されているということ。
- ②早くに聴覚の敏感さに気づき作曲家に育てるという目的を持ったことが演奏会の成功へと導くことになったということ。
- ③回復に向かう変化を見落とさないことが大切であり、CDや演奏会の成功などはその結果に過ぎないということ。
- ④人間は回復するということを信じ共生することによってすばらしい才能が発揮されることが最終目標であるということ。

問七 傍線部(五)「私たちはそういうやり方を学習してきたのです」とあるが「そういうやり方」とはどういうことか、本文をふまえた説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

- ①人間は「恢復」するものだという発見によって障害をもった息子との共生をこれまで続けてこられたということ。
- ②息子との共生の永い歲月によって、筆者の文学の核心にあるものが生育してきたという考えを得られたということ。
- ③自然に芽生えた人間の「恢復」という考え方をより意識化された進歩の道のないでいく方法を学ぶということ。
- ④光さんが自立するまで人間は「恢復」をなし得るという心情を持ち続けて筆者夫婦は生きていくのだということ。

問八 傍線部(六)「それは、かれの死後もなお生き延びている自分の、生涯最後のものともなるはずの死生観へ、新しい光を投げかけてくるとさえいいたいのです」とあるが、筆者の「死生観」とはどういうことか。説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

15

- ①同年齢の親しい友人が不治の病に侵されながら懸命に生き続ける意思を示したことから、自分の死も「恢復」にひとしい力を持つだろうという虚しい慰めを得たということ。
- ②病に侵されたもののサイド自身の「後期の仕事」が完成したことから、病からの「恢復」が死にひとしい力を持つという確信を得たこと。
- ③ドキュメンタリーに映された友人の死を前にしたやつれた顔から衝撃を受け、彼の死が「恢復」にひとしい力を持ち得ないという諦めに至ったということ。
- ④最期の時まであきらめずに発言を続け、晩年の仕事に力を尽くしたサイドの姿から、死が「恢復」にひとしい力を持つという希望を得られたこと。

問九 本文の内容と合致するものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。

16

17

①筆者は、「まっすぐ立っている」という人間についての基本的な信条を息子の通院の場で得たように、「人間は回復するものだ」という確信も病院の待合室で辞書を引いたことで学んだとしている。

②筆者は、次々に起こってくる息子の困難な状態に対して、その連続は避けられないがつねに「回復」がもたらされることから夫婦は息子と共に以前より一歩前に進んできたと確信している。

③筆者は、自分たちと同じく知的障害を持った子どもの母親から、早期教育によって才能を伸ばし得る方法を質問され、ただ上向きの変化を見落とさないことが素晴らしい結果に結びつくのだと教えて励ましている。

④筆者は、光さんが自分なりに音楽理論の勉強を続けて、より意識化された進歩の道のりを進んでいることを信じ、自分たち夫婦との共生が命の続く限りかれの回復を支えるのだとする。

⑤筆者は、敬愛する友人エドワード・W・サイードがアメリカ生まれの知識人でありながらイスラエルとパレスチナの問題に対して妥協のない発言を最後まで続けたことを高く評価している。

⑥筆者は、日本人の撮影した映画によって友人の死を前にした新たな顔を知り、かれの死後生き延びる自分たちの行く末に漠然とした不安を抱えていることがわかる。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

家電製品は誰もが重宝だと認めますが、それはプラスの効用だけではありません。それがもたらしたマイナスの影響も少ないのです。家電製品が入ったことで、子どもが家事の手伝いをする機会が減ったことは、日本に特有な現象のようです。これは、「家事への家電製品の導入」、ア「家事の機械化」をどうみるか、また家事をどのような仕事とみるか、あるいは誰の仕事とみるかに関係しています。

洗濯機にしても掃除機にしても機械化とは、単にシヨウリヨク化ではありません。重要なことは、「誰でも同じようにできる」ことを可能にしたことです。機械がない時代は、調理や洗濯についての知識と技能が必要であり、それをもった人でなければできない仕事でした。イ、かつての女性は結婚前「家事見習い」として料理や洗濯、ふとん作りなどを仕込まれました。そうした知識と技能をもつ「嫁」＝主婦にしか主な家事はできなかったのです。一九七〇年代、多くの家庭に家電が入ったことは、そうした知識や技能をそれほど必要ではなくなりました。機械の使用説明書どおりにすれば、だれでも同じようにできるようになったからです。

ウ、日本ではこの「誰にでもできるようになった」ことがあまり認識されませんでした。主婦の長時間労働を短縮し、主婦が楽になった側面ばかりが認識されたのです。エ 子どもの手伝いが不要とされることとなったのです。

概して欧米では、男性も子どもも日本よりずっと家事をします。とりわけ家電製品が入ったことで、男性と子どもは家事の遂行者として存在感を増しています（総務庁青少年対策本部「子供と家族に関する国際比較調査報告書」一九九六年）。女性の家事時間は男子（夫）と子どもの家事に参加することによって減少しています。しかし日本では家電導入後も男性においても子どもにおいても家事への参入は起こりませんでした。

こうした欧米の変化は男女平等という考えもあるでしょうが、家電製品の効用として何に注目したか、さらに家事というものをどう考えるかということと関係しています。

家電の普及という「社会の家族への侵入」が、欧米では家族のあり方を変化させる契機となったのです。これが日本では起こりませんでした。同じ文明のオン・^Bケイを受けながら、「誰にでもできる」という機械化の効用についての認識不足、加えて「家事は女子の仕事」とのジェンダー規範、さらに「子どもには勉強を」という知育第一の考え、これらが欧米との違いをもたらしたのです。

料理や洗濯、掃除などの家事は、いうまでもなく家族の心身の健康と安定した生活を保障する基盤です。そのための労働です。これを担うのが、日本では基本的に主婦・女性の役割になっています。主婦以外の家族が家事をする場合「家事協力」とか「お手伝い」といわれるように、それはあくまでもオプションとして認識され、家事は主婦という女性の仕事となっています。

こうした体制がカク^Cリツしたのは、男性・夫が外で働き、女性は家庭にとどまり家事・育児を担うことになって以来のことです。一九五〇年代に大量のサラリーマンが誕生したことで連動しています。それ以前の農家や商家では、男性も女性も畑や店などで働き、手の空いた者が臨機応変に家のことも子どもの世話もやっていました。職業時間と家族時間は相互に入り組んでおり、男性も女性もそのどちらにも関わっていたのです。

職業の外部化を契機に、職業は男性、家庭は女性と生活が分離して以来、家庭にいる女性が主婦として家族がらみの労働を一手に引き受けることになりました。いわゆる性別分業です。これは不平等だと非難されることが多いのですが、一概にそうとはいえません。かつては、女性にはごく限られた職業しかなく、他方、男性の労働は（女性より）稼ぎがいいという状況でしたから、男性は職業につき、女性は家庭の役割をこなすという分担は、それなりに理にかなったものでした。性別分業で行うしか手がなかったし、それが効率的な方式でもあったのです。

その後、状況が変化し、女性にも職業の道が開かれました。いま、夫婦共働き家庭が、夫だけが稼ぎ手である家庭を上回るほどになりました。完全な性別分業家族は減少しました。

しかし、女性の仕事をもつても、家事は依然として女性の役割である場合がほとんどです。女性にパート職が多いのはいろいろな事情がありますが、その一つには「家事に差し障りのないように」働いたためです。女性自身も主婦という自覚からこの条

件を大事にしますが、それ以上に周囲がそれを求めます。すでに述べたように妻が働くことを夫が認める場合に、「家事や育児をおろそかにしない」「差し障りのない程度に」と釘をさすことも稀ではありません。

こうした認識は現在も広く社会に共有されています。経済効率を最優先する企業では、出産し子育てを抱えた女性が働き続けることは期待せず、また好まないといってもよいでしょう。出産を機に退職した女性が再就職するのは至難の業です。家事・育児は依然として女性の仕事と考えられているからです。

仕事をもつ女性は、「すまない」という意識をもちやすいものです。これは自分の役割である（と思っている、期待されている）家事や子どもの世話を、（無職の主婦のように）十分にやれない（やらない）自分を責めての感情です。ここにも、家事は女性の仕事という規範意識の強さが、女性自身にも強いことがみてとれます。

「すまない」との気持ちは会社や職場に対しても抱きます。多くの会社が人件費抑制のために従業員を減らし、一人一人の労働は過密になっており、猛烈な働き方が要求されます。子育てに時間をとられる女性はそうした働き方ができず、会社や職場にも「すまない」と感じることもなります。こうした二重のストレスが女性の未婚化、さらには少子化の遠因でしょう。

いまに比べてかつては、家族がもつとまとまっていたという見方があります。しかし、家族のまとまりが弱まったのも「社会が家族に侵入した」結果の一つなのです。「まとまっていた」のはまとまる必要があつたからで、好んでそうしていたとは限りません。また「ばらばらになった」と悲観的にみずに、拘束が弱まり自由度が増したとみることもできます。

いまから五〇〜六〇年前、日本の多くの家で春と秋に大掃除が行われていました。家中の畳を全部上げ、外に運んで干す。畳の下を床を掃除し、薬を撒いて新聞紙を敷き替える。干した畳をたたいて取り込んで元の位置に敷く、板戸や廊下は水拭きし乾拭きする……。このように、一日がかり、一家総出の行事でした。労働そのものも楽ではありませんでしたし、友だちと出かけたなどといった、自分の希望も都合も通らないことは、子どもにとっては苦痛でした。

この大掃除の習慣はいつしか消滅しました。道路も完全舗装化され、サッシによって砂塵の侵入を遮断することが可能となったことが一因です。ほうきやはたき、雑巾などとは比較にならない有能な電気掃除機によって日常の清掃は完璧にこなせます。

一家総出の大掃除という労働の消滅はひとえに、これらの文明のリキ^pのおかげであり、それが家庭に侵入した結果です。大掃除の消滅は家族のメンバーを家の行事という拘束から解放し、個人の自由度を増しました。けれども、失ったことも大きいのです。^三子どもが成長するにつれて、親から子どもが当てにされて、それに応じて子どもが力を発揮して、ありがたがられる。認められた子どもは自信をもつ。そうしたことが、この「大掃除の時代」にはありました。

もちろん大掃除に限らず、こうした体験は、家族が一緒に働くことで得られるものです。また家族中のおとも子どももそれぞれが精一杯協力して働き、一つのことを成し遂げるといふ喜びや、あるいは家の中がきれいになることで爽快感や満足感を共有することもできます。

しかし、このような体験の機会は今現在、失われています。こうした^Eゲンジヨウを考えると、「してあげる」のではなく、子どもたちにできることはあえて親は「してやらない」、すなわち自分でする機会をつくるといったことを、今日では、特に心がける必要があるのではないでしょうか。

（柏木 恵子『子どもが育つ条件：家族心理学から考える』より）

問一 傍線部A・B・C・Dと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ショウリョク

- ① ショウキョク的な性格の人物
- ② カンキョウシヨウの打ち出した政策
- ③ ショウヒョウ登録を出願する
- ④ 彼は大変シヨウジキ者な人物だ
- ⑤ 小学校でショウギがブームになる

18

B オンケイ

- ① 被告人に対しキュウケイする
- ② イツケイを案じて戦に勝利した
- ③ チュウケイ現場からは以上です
- ④ ケイバ場に人が集まる
- ⑤ 看護にはジケイの気持ちが必要だ

19

C カクリツ

- ① 期日までにカクテイ申告を行う
- ② 料理の腕がカクダンに上がる
- ③ 主人公がカクセイする
- ④ グループカクシャと連携する
- ⑤ カクギ決定された方針

20

D リキ

- ① キガクの講義ではピアノを弾く
- ② 反復練習でキノを定着させる
- ③ 彼のキハクに圧倒される
- ④ 急いでキロにつく
- ⑤ キチヨウ品を紛失する

21

問二 傍線部 (a)・(b)・(c)・(d)・(e) の各熟語の成り立ち方として正しいものを、次の①～⑥の中から一つずつ選べ。

(a) 重宝

(b) 知識

(c) 家電

(d) 不要

(e) 退職

2 2

2 3

2 4

2 5

2 6

① 同じような意味の漢字を重ねたもの

② 反対または対応の意味を表す字を重ねたもの

③ 上の字が下の字を修飾しているもの

④ 下の字が上の字の目的語・補語になっているもの

⑤ 上の字が下の字の意味を打ち消しているもの

⑥ ①～⑤のいずれにも当てはまらない

問三 空欄

ア

イ

ウ

エ

に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ

一つずつ選べ。

ア

① そこで

② たとえば

③ つまり

④ しかし

⑤ また

2 7

イ

① そこで

② たとえば

③ つまり

④ しかし

⑤ また

2 8

ウ

① そこで

② たとえば

③ つまり

④ しかし

⑤ また

2 9

エ

① そこで

② たとえば

③ つまり

④ しかし

⑤ また

3 0

問四 傍線部（一）「家事は主婦という女性の仕事となっています」とあるが、その要因にはどのようなことが考えられると筆者は述べているか。傍線部（二）のような体制が築かれた当時の時代背景も踏まえ、最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

31

- ①サラリーマンの登場により農家や商家の数が減少したから
- ②現代に比べ昔は女性に務まる職業には限りがあったから
- ③家事手伝いは賃金が安く職業として軽視されてきたから
- ④家事は女性の方が効率よく行えると認識されていたから

問五 傍線部（二）「しかし、女性は仕事をもつても、家事は依然として女性の役割である場合がほとんどです」とあるが、それはなぜか。理由として不適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

32

- ①多くの会社が経済効率を求め社員一人一人に過重な仕事を課しており、子育てをしながら働くことは難しいため
- ②子育てを含む家事は女性の仕事だと考えられており、周囲も家事に差し障りのないように働くことを求めているため
- ③出産を機に退職してしまった場合、再就職が難しく、結果的に男性が稼ぎ女性が家事をすることになるため
- ④男性の産休や育休に対しまだ企業の理解が無く、昇進しにくくなり、さらには退職に追いやられることもあるため

問六 傍線部(三)「けれども、失ったことも大きいのです」とあるが、具体的に失ったものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

33

- ①個人の自由度
- ②家事の効率化
- ③家の中の爽快感
- ④家族の団結力
- ⑤子どもの規範意識

問七 本文中に述べられている内容と合致するものを、次の①～⑤から一つ選べ。

34

- ①女性の未婚化や少子化の背景には、日本において高品質な家電は価格が高く、一般家庭では手にすることが難しいという現状があるため。
- ②欧米では家電製品が普及するにつれ、男性や子どもの家事参入が進み、女性の家事時間は減少している。
- ③一九五〇年以前は女性が主に畑や店で働いていたため、家事や育児は男性が行うという分業が行われていた。
- ④大掃除の習慣が消滅した背景には、床が畳ではなくフローリングに変化したことも、要因の一つとして挙げられる。
- ⑤家電の普及により家族時間の拘束が減少し、まとまりが弱まったことで、家族としての役割分担が妻に偏ることとなった。